新世紀ミュージアム

卯田 宗平（うだ しゅうへい）　民博 人類文明誌研究部

琵琶湖のほとりに位置する滋賀県立琵琶湖博物館では、漁具の実物やしくみの紹介だけではなく、人と魚のかけ引きの瞬間も見ることができる。自然と人間とのかかわりをありのままに展示する博物館の工夫に迫る。

待ちの漁具をいかに魅せるのか

魚をとるための道具は、精緻であるが総じて地味である。ここでいう地味とは、目を引くような色鮮やかさはないという意味である。

漁具のなかには、魚の習性を利用し、仕掛けのなかに魚を誘導してとらえる「待ちの漁具」とよばれるものがある。筌（うけ）や簗（やな）に代表されるそれらの漁具は、魚が生息するところ、あるいは通過するところに設置され、魚をなかへと誘い込む。このため、漁師たちは魚が仕掛けの前で異変に気づかないように漁具の材料や形状に工夫を凝らす。「待ちの漁具」が地味なのは当然である。

漁具、特に地味な「待ちの漁具」をいかに展示場で魅せるのか。わたしはこんな思いを抱きながら博物館をめぐっていると、滋賀県立琵琶湖博物館における簗漁の展示に心引かれた。

湖と人間とのかかわり

滋賀県立琵琶湖博物館（以下、琵琶博）は、「湖と人間」をテーマに研究する博物館として一九九六年に開館した。館内では、琵琶湖とその集水域の生態や歴史、人びとの暮らしにかかわる展示をとおして、湖と人間のかかわりをその両面から理解できる。

二〇一六年に開館二〇周年を迎えた琵琶博は、「琵琶湖の情報をリアルタイムで伝える」や「大人でも楽しめる」という理念のもと、リニューアル作業が進められている。二〇一六年七月には、魚を中心に淡水の生き物を展示する水族展示がオープンし、バイカルアザラシの展示やその日の琵琶湖のプランクトンが観察できる「マイクロバー」などが人気を集めている。二〇一六年の入館者数は四六万人を超えた。

このほか、湖魚の食文化に関する展示や、森のなかでコロニー（集団繁殖地）を形成するカワウと湖、森林とのつながりを紹介するためにカワウの糞（ふん）や尿（にょう）の臭いを再現しているコーナーもあり、館員の研究成果を理解できる。

簗漁の再現

リニューアルされた水族展示には、「下流域の魚たちと簗漁」というコーナーがある。ここには、館内で唯一、流れを作ることができる水槽が設置されている。水槽の大きさは、長さ六メートル、奥行一・五メートル、水深四〇センチメートルである。水が流れる速度は毎秒三〇センチメートルである。

この水槽のなかに簗の一部が再現されている。簗とは川幅いっぱいに杭（くい）や竹を敷設することで流れを堰（せ）き止め、遡上する魚を河岸に設けた生け簀（す）まで誘導し、捕獲する漁法である。展示場にある簗は滋賀県高島市を流れる知内（ちない）川のものであり、地元ではカットリヤナとよばれる。カットリとは「掻き獲る」ということばから転じたものだ。

水槽のなかにはアユやウグイ、ハス、ニゴイなどが泳いでいる。水槽に流れを作ることで、魚が水槽の上流域に「遡上」し、簗に捕獲される様子を再現しているのである。実際、時期がよければ簗を飛び越えようとする魚を見ることができる。

また、水槽の背後には知内川において扇状に張られた簗の情景写真がある。この写真により、展示場の簗と周辺の風景とが連続したかたちで見てとれる。

流れに逆らいながら泳ぐ魚を横から見ることができる

展示場の背景には知内川に張られた簗の情景写真が展示されている

流れのある水槽のなかに復元されたカットリヤナ
（掲載写真はすべて、同じ水槽を別の角度から撮影したもの。2017年）

そこに緊張感はあるのか

水槽の前に立つと、水が簗を流れくだる音や泡立って白く見える波、流れに逆らって泳ぐ魚の姿など、展示物全体から動きや音を感じる。来館者は魚が生け簀に入る瞬間までわかり、緊張感をもって展示物を見ることになる。

緊張感。これこそが地味な「待ちの漁具」を魅せるために必要なのではないだろか。考えてみれば、漁業というのは人と魚との知恵比べである。我われ人間に知恵があるかどうかは当日の漁獲物を見るまでわからない。シビアな世界であり、緊張の瞬間でもある。こうしたなか、漁師たちは魚の習性を研究し、より機能的な漁具を準備する。

簗漁の展示は、その現実をできるだけ現実のままに、漁具が実際に機能する瞬間を見せているのである。河川と漁具、魚を本来の組み合わせで再現するという展示の方法は、水族展示の専門家が所属する琵琶博でこそ可能である。

地味な漁具をいかに展示し、どのように来館者の注意を喚起するのか。琵琶博にはひとつの回答が用意されている。動きや音により増幅される緊張感を皆さんもぜひ体験していただきたい。なお、展示期間は魚が遡上する時期にあわせて毎年四月から八月末ごろまでである。

展示場の出口にしるされていることば。琵琶博は何のために存在するのかを来館者に考えさせる仕掛け